

とうじやしき じょうやとう

## 唐治屋敷の常夜燈

(緒川新田)

おがわしんでん とうじやしき おおむかし とうしすなわ  
「緒川新田の唐治屋敷は、大昔、陶師即ち、

や ものし す  
焼き物師たちが住んでいたところです。その後、

たはた えどじだい なか おがわ  
田畑となり、江戸時代の中ごろには、緒川から

ひと うつ す あたら しゅうらく つく はじ  
人が移り住んで新しい集落を作り始め、さら

のやま き ひら たはた ひろ  
に野山を切り開いて田畑を広げていきました。

そして、めいじ はじ  
そして、明治の始めころには、三十軒もの家が

建 っ て いました。

「この地区にも家がふえてきたが、夜になって、

じょうやとう  
常夜燈がないのは、さみしいのう。」

じょうやとう  
「そりやあ、常夜燈があったらよかろうに。」

いま あたら じょうやとう つく  
「だか、今、新しい常夜燈を作ると、ぎょうさ

かね  
んの金がいるのでのう。」

「いったい、どのくらいかかるもんだい。」

「さあ、のう。」

とうじやしき すひと あいだ はなし  
唐治屋敷に住む人たちの間に、こんな話が

か  
交わされるようになったのは、めいじいしん へんどう  
かわされるようになったのは、明治維新の変動

もおさまり、よやく世の中が落ちつきをとり  
もおさまり、ようやく世の中が落ちつきをとり

もどしてきたころです。

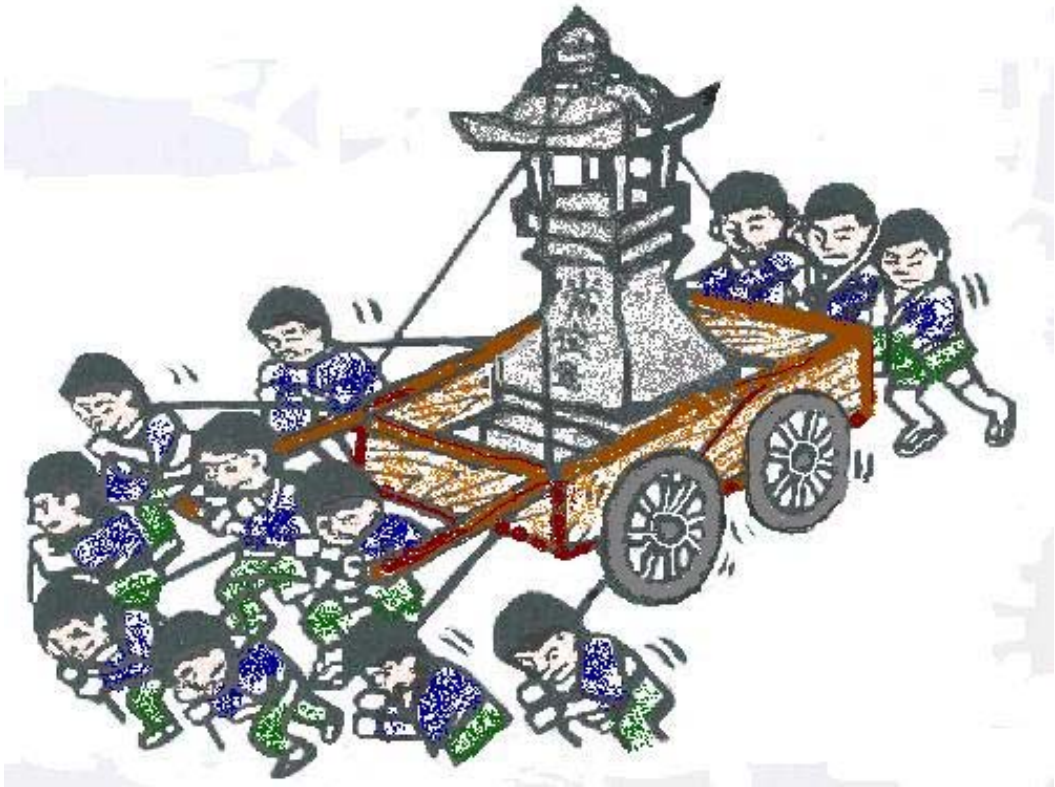
ちようどそのころ、かりや ようた い  
ちようどそのころ、刈谷へ用足しに行ってきた

むらびと ひとり あいづまがわ いちばら いりえ  
た村人の一人が、逢妻川の市原の入江にあつて、

みなと でき ふね  
港に出入りする船のめじるしとなっていた常  
やとう いりえ う た  
夜燈が、入江の埋め立てでいらなくなっている  
はなし き  
という話を聞いてきました。持ち主は、もと、  
かりやはんし いのやすうえもん ひと ゆず  
刈谷藩士だった井野安右衛門という人で、譲つ  
てもよいといっていることもわかりました。

ねが はなし  
「それは、願ってもない話だ。さっそく譲つて  
もらおうじゃないか。」

はなし き  
話はすぐに決まって、当時としては格安の二  
えん わ  
十五円で分けてもらうことになりました。そし  
とうじやしき ひと そうで おも いし じょうやとう  
て、唐治屋敷の人たちが総出で、重い石の常夜燈  
うんぼん あ めいじ ねん あき りっぱ さいけん  
の運搬に当たり、明治二十年の秋、立派に再建さ  
れました。





▲ 唐治屋敷の常夜燈  
とうじやしき じょうやとう

それから、この常夜燈は、村内安全のシンボルとして、夜の村を明るく照らしてくれるようになりました。

今もその常夜燈は、緒川新田の名鉄の踏み切りから東へ二百メートルほど行ったところに

建っています。船の神様である四国の「金毘羅」の文字が刻まれているのは、刈谷にあったとき、航海安全を祈って建てられたものだからです。